

講演

人間科学の歴史的パースペクティブ

加藤 茂生¹(¹早稲田大学人間科学学術院)

私は人間科学の歴史そのものを専門としているわけではないが、科学史・科学論という立場から、欧米や日本の人間科学の歴史を俯瞰し、人間科学はなぜ、どのように成立し、展開してきたのかということを考えてみたい。

最初に、日本において人間科学に関して行われてきた議論の流れを踏まえておこう。日本学術会議の長期研究計画調査委員会が1960年頃から人間科学に関する研究所案について検討し始め、1962年12月から1963年5月までに3回にわたって「人間の科学に関するシンポジウム」が行われた。その結果、「人間科学総合研究機構案」が生まれた。これが日本において人間科学に関して集中的に議論されたもっとも初期の機会だったと言えるだろう。その後、1970年以降、大阪大学や早稲田大学などで「人間科学部」という名の学部が複数設置されていった。そして、1988年には、それらの大学の人間科学部の先生方によって「人間科学の確立に向けて」というシンポジウムが開かれ、「人間科学とは何か」という問題が議論された。その流れのなかから、1995年に「フォーラム人間科学を考える」が設立された。本学の野嶋栄一郎先生がこの設立にかなり関係なさっていたと聞いている。その翌年、1996年の第2回「フォーラム人間科学を考える」は、本学所沢キャンパスで開催された。翌1997年には第3回の会議も開催された。このように1980年代から1990年代にかけて「人間科学とは何か」という問題が熱心に議論されていた。本学においても、人間総合研究センターが刊行する雑誌『ヒューマンサイエンス』に、1988年から2003年まで「人間科学を考える」というシリーズが連載された。このように2000年代初めまでは人間科学という新しい学問分野の意味や位置づけに関する議論が活発に行われていたが、その後、議論は比較的下火になっている印象がある。よって、この機会に人間科学について考えてみることは有意義なことだと思う。

さて、人間科学はなぜ、どのように成立したのかを考えるために、まず、西欧における「科学」の成立の歴史に目を向けてみたい。中世の西欧に生まれた初期の大学は原則、神学部、法学部、医学部を備えていた。つまり、大学は基本的に聖職者や法律家、医者という知的プロフェッションを育成する組織だった。神学部、法学部、医学部という3つの上級学部の下に哲学部という学部があった。哲学部は

上級学部に進学する前に知性をトレーニングする場所で、そこでは、主に「算術」「幾何学」「音楽」「天文学」「文法」「修辞学」「論理学(弁証論)」で構成される「自由七科(自由学芸、artes liberales)」が教えられていた。ちなみに、この「自由学芸」がリベラルアーツ“liberal arts”の語源である。また、もともと「哲学」は現在の哲学のように狭い意味ではなく、自然についての学問である自然哲学をも含む幅広いものであった。そして、中世以来、西欧の哲学はキリスト教と結合したアリストテレスの哲学が中心的な位置を占めていた。初期近代にアリストテレス哲学に反旗を翻したガリレオやデカルト、ニュートンらの知的営みもキリスト教文化の一部であり、神が世界に埋め込んだ秩序の読解が彼らの知的探究の重要なモチベーションであった。ガリレオやニュートンらの哲学の一部から、今日の「科学」と対応する知識を部分的に切り出すことができるとしても、全体としては彼らの知的営みは現在の「科学」研究とは異なる営みであったと言える。

しかし、キリスト教文化の一部であった学問が世俗化する、つまり神と切り離されていくというプロセスが発生する。まず、フランシス・ベーコンが「神の学」と世俗の学である「人間の学」を分けた。その「人間の学」の中には、歴史・哲学・詩学があるとされた。ベーコンの学問の三分類(歴史・哲学・詩学)を受け継いだのが、啓蒙主義者のグランベール、ディドロの『百科全書』である。とりわけ、この『百科全書』で特徴的なのは、歴史の中に神の歴史と人間の歴史を含め、哲学のなかに神の学と人間の学も含めたことである。つまり、神に関する学とその他の学を切り離した上で、それらを同列に扱うべしという主張が啓蒙主義の中で登場してくるわけである。通常、我々科学史家はこれを「学問の世俗化」と呼んでいる。この世俗化された学問の追究として、サン・シモン、コント、ジョン・スチュアート・ミルらの実証的な知識に基づいた「人間についての学」が行われることとなった。

このように啓蒙主義時代以降、世俗的な「人間についての学」が、ヨーロッパで形成されるわけだが、その「人間についての学」は、非常に幅広いものだった。それが変わってくるのが19世紀である。1830年代に、ウィリアム・ヒューエルが“scientist”(科学者)という言葉を創る。“scientist”

という言葉はこの時代に初めて出てくるのであり、上述したガリレオ、デカルト、ニュートンらは“scientist”にあたる言葉で呼ばれたことはない。彼らはあくまで“philosopher”（哲学者）と呼ばれていた。“scientist”という言葉は、ラテン語で「知」全体をあらわす“scientia”（スキエンティア）という言葉に“ist”という語尾をつけた造語である。当時、“scientist”という言葉は、非常に奇妙な言葉、あるいは汚い言葉だと非難された。「このような言葉を造ったのは学が無い者に違いない」と罵倒する者さえいた。なぜそのように非難されたかというところ、 “scientia”という言葉が知識全体を表すのに対し、“ist”という言葉は非常に狭い範囲の専門家を表す言葉だったからである。たとえば、「音楽家」という広い意味の言葉である“musician”の語尾は“ian”だが、ピアニストやバイオリニストといった個別の楽器の演奏者を表す言葉の語尾は“ist”である。このように“ist”が付く言葉は狭い範囲の専門家を意味する。“scientia”という知識全体をあらわす言葉に“ist”をつけるのはおかしいのではないか、というのが奇妙な言葉と非難する理由だったのである。しかし、ヒューエルは学が無いどころか、ケンブリッジ大学教授で当時のイギリスにおける超一流の知識人であった。彼は百も承知でこの言葉を創ったのである。それはなぜか。ヒューエルには、19世紀には、それまでのフィロソファーとは違うタイプの知識人が登場してきたように見えた。その新しい知識人たちがやっていることは、それまでの幅広い「哲学」とは異なる、専門分化＝「コンパートメント化」した個別の学であり、彼らはもはやフィロソファーとは呼べないという認識があった。そこで、“scientia”に“ist”をつけた新語を創ったのである。つまり、19世紀において知識のありようが大きく変わっている。それをこの“scientist”という言葉の成立は表しているのである。以上のように、哲学のキリスト教からの切り離しと細分化という大きな二段階の知の変容を経て、「科学」が誕生したわけである。

日本語の「科学」という言葉は、私が知る限り1871年の井上毅の「学制意見」に初めて登場する。この「科学」という言葉は「分科の学（分かれた科の学）」という意味である。これは、それまで自然探究を意味していた日本語の「窮理（理を窮める）」という言葉では、西洋の“science”を表すのにふさわしくない、西洋の学問の特徴は科が分かれた学問である、という認識を井上毅が持っていたことを表している。

科学の成立を踏まえた上で、人間科学について話す前に「人文科学」という言葉についてひとこと触れておきたい。「人文科学」は“Humanities”（ヒューマニティーズ）という英語の翻訳であると捉えてよい。つまり、“Human Sciences”の翻訳ではないということだ。では、このヒューマニティーズはどこから来ているかというと、ラテン語の

“humanitas”（フマニタス）という言葉から来ている。フマニタスとは、もともと「人間」あるいは「魂」を表す言葉であり、さらに、ルネサンスにおいてギリシャ・ローマ・アラビアの古典を復興し、それによって人間についての知識を深めていった古典文献学の学問をも意味していた。「中世の大学で行われていた学問は論理的整合性を重視し過ぎており、人間の汚さ、醜さ、愚かさ、美しさなどの人間性を深く探究するものではない、人間性の探究はギリシャ・ローマ・アラビアの古典テキストを読むことを通じて行われる」という意識から、フマニタスは古典文献学として登場してくるのである。そして、フマニタスを語源とするヒューマニティーズという語は“science”という語と結合していない。したがって、ヒューマニティーズを「人文科学」と訳すのはあまり適切ではなく、「人文学」と訳すのが日本語としては適切だと個人的には考えている。ではなぜ日本でヒューマニティーズが「人文科学」と訳されたのかという問題は、科学史的には非常に興味のあるところだが、ここでは置いておく。

もうひとつ、人間科学に似た言葉で「人類学」(Anthropology)という言葉がある。その語源である“anthropologium”（アントロポロギウム）というラテン語は、16世紀初め頃、フントの本に登場する。この場合のアントロポロギウムは、解剖学とか形態学という意味であり、それが後の形質人類学、自然人類学と呼ばれるものにつながっていく。一方、ドイツ語の“Anthropologie”（アントロポロジー）という学問も形成される。これは1798年にカントの「実用的見地における人間学」という講義録で登場する。このアントロポロジーは、人間の本質は何か、様々な地理的・歴史的な条件に規定される人間の性格とは何か、といった人間についての哲学的な考察であり、我々が言うところの人類学とは違う。その後、19世紀の終わりに“Anthropology”つまり近代的な人類学が誕生する。イギリスのタイラーは人類学の父と呼ばれるが、彼は『原始文化』という本を書いている。これは未開社会を扱ったもので、未開社会の人類を研究することによって人間の本性を探ろうという試みが行われている。そしてアメリカでは、モルガンが『古代社会』という本を書く。モルガンはアメリカの人類学の父と呼ばれたりするが、いずれにしても近代人類学は、最初は主に未開社会を対象とする研究として始まり、その後、未開社会に限らず研究範囲を広げていくことになる。以上のように、我々が考えるところの「人間科学」は、人文学とも人類学とも異なった概念であることを確認しておきたい。

では、「人間科学」はどのように誕生したのか。そこで、19世紀に“science”が誕生した頃にやはり成立した「学問の三分類」について検討してみよう。

「学問の三分類」の一つは「自然科学」である。現在でも、通常“science”というと、第一義的には自然科学を表すだろう。19世紀においては、物理学・化学・生物学・地質学等の自然科学が大成功を収めていた。とりわけ物理学は地上の物体の運動から宇宙の惑星の運行まで精密に予測でき、非常にすぐれた知識として学問の模範とされていた。そこで、化学や生理学に基づいた人間の探究が自然科学として考えられていく。また、人間の集合である社会についても自然科学の方法、例えば統計学などを用いて探究する学問が19世紀後半に出てくる。こうして、法学・政治学・経済学・社会学・人類学といった学問が「社会科学」として考えられるようになる。「自然科学」、「社会科学」に哲学・文学・歴史学などの「人文学」を加えて「学問の三分類」といわれる。

人間科学はこれら学問の三分類、そして、それらを構成するさまざまな専門分野のどこに登場するのかというのが問題だが、通常は見当たらない。つまり人間科学は、19世紀以来の慣習的な学問分類のなかには見出せない。ただし、我々が現在「人間科学」と呼ぶ学問の中には、人類学・心理学・社会学など多数の学問が含まれている。つまり人間科学とは、多くの慣習的・伝統的な学問分類にまたがるといえるわけである。

では、なぜそのような慣習的な学問分類に入らない「人間科学」が登場することになったのか。19世紀以降の学問の「コンパートメント化」、つまり学問が細かく分類されていく流れに対抗するものとして登場してきたのではないかというのが私の考えである。その契機のひとつが、19世紀終わりのドイツで行われた「人間科学の方法論争」である。これは丸山高司先生(大阪女子大学)の議論を引き継ぐ考えである。19世紀終わりにドイツで“Geisteswissenschaft”(精神科学)という学問が提唱され、人間を対象とする学問の方法をめぐる論争が行われた。論争の立役者は哲学者ディルタイや歴史学者のドロイゼン、理解社会学のマックス・ウェーバーなどである。彼らは、従来のコントやJ. S. ミル等の人間理解は、観察者が人間を対象化する、つまり観察者と被観察者が明確に分かれる形で観察者が被観察者を眺める、自然科学的な理解だとした。そして、それだけで人間が理解できるだろうかという問いを立てた。コントやミルたちの人間を対象化する自然科学的な方法による人間理解に対して、人間的な関係の中で相手を解釈する理解、相手が意味しているところの共感的理解などが、人間を理解するには必要ではないか、と主張したのである。これがディルタイらの展開した「精神科学」の運動である。「精神科学」はその後、マックス・シェラーの哲学的な人間学などへと繋がっていくことになる。私は、こういったドイツ系の「哲学的な人間学」が人間科学のひとつの流れであ

ると考えている。

一方、アメリカではまた別の人間科学の流れがあった。1930年代から1950年代のアメリカで、“Science of Man”と呼ばれる、人類学・心理学・社会学等の人間に関する実証的な諸科学を統合する運動が展開された。その主唱者が人類学者の大御所であったラルフ・リントンである。彼は1944年に*The Science of Man in the World Crisis*(邦題＝世界危機に於ける人間科学)という本を編み、人類学が中心となって心理学や社会学などの学問を統合して問題を解決する学問として、「サイエンス・オブ・マン」を提唱した。個別諸科学で別々に知識を発達させていくのではなく、問題を解決するために個別諸科学を統合する。それがリントンの発想であった。このような運動は1962年の大統領科学諮問委員会における「行動科学の強化」に繋がっていくが、「サイエンス・オブ・マン」が「行動科学」へと変わる過程で、その統合性が徐々に変質していく。とはいえ、人類学を中心として心理学・社会学およびその他の社会科学を統合しようという運動がアメリカにはあったのである。この背景には、第二次世界大戦中に人類学が占領地の統治に有用な知識として用いられたということがあった。例えば、ルース・ベネディクトの『菊と刀』に結実した人類学的日本研究は有名である。占領地統治以外にも、貧困問題や人口問題、ネイティブアメリカン、少数民族の問題など当時のアメリカが抱えていた問題にどう対処するかという意識がサイエンス・オブ・マンを提唱したリントンにあった。また、理論的背景として、それまでの分析的で還元主義的な科学とは違う、全体を捉えるような情報理論やシステム論のような、人間の振る舞いを全体的に数量化する科学の登場もあった。

最後にフランスのケースを取り上げてみたい。フランスの場合、1950年代後半以降、“Sciences Humaines”は大学の制度のなかで、社会科学や人文学を広くカバーする概念として使われてきたという事情があり、その学問的な特徴を見出しにくいところがある。ただ、その概念的広さの思想的背景を考えると、フランスには、人間についての実証的な知識が哲学とも自然科学とも接続するような幅広い観点が存在していたことが指摘できよう。例えば、デカルトの哲学における情念論や、生理学や化学を基礎にして人間を考えたサン・シモンらの議論の流れである。また、特筆すべきこととして、1950年代に歴史学者のブローデルが「人間科学館」の設立運動を繰り広げたことが挙げられる。「人間科学館」設立はなかなか実現せず、結局1974年ようやく実現するが、ブローデルの1950年代の運動には、人間科学は再編成しなければいけない、諸学を統合した学として創られねばならないという発想があった。また、心理学者のピアジェは「発生的認識論国際センター」の設

立に尽力した。これも学際的な人間科学の研究組織であった。ピアジェは、生理学や数学といった自然科学的な学問とつながった心理学、人間科学を構想したことが特徴的であった。1960年代に入ると、教育学者のギュスドルフがアメリカ的な行動科学に対する批判を行った。ギュスドルフは哲学と切り離された人間科学を批判し、包括的な人間科学を提唱した。フランスではこのような様々な動きが注目されよう。

以上をまとめると、ドイツ・アメリカ・フランスで起こった人間科学に関するいずれの運動も、19世紀的な学問に対するオルタナティブとして人間科学を形成しようとした運動だったと言える。19世紀に学問がコンパートメント化した形で成立する。そして、いずれの専門的学問も自然科学を模範にして学問を創り上げようとする。それに対して、ドイツでは「精神科学」という運動において、解釈や理解を中心に置いた「生が生を捉える」という形の人間理解が提唱される。アメリカでは、問題解決を主眼として実証的な諸科学を統合しようとする「サイエンス・オブ・マン」が展開された。フランスにおいては、制度的なファクターもあるのだが、思想的な流れとしては、自然科学を基盤にして、しかし哲学に対して閉じていない包括的な人間科学を求めようとする志向性があったと言える。

欧米での人間科学をめぐる運動から大なり小なり影響を受けて、日本でも人間科学を求める運動が起こった。最初に述べたように、1960年代初め、日本学術会議で全国共同利用研究所としての「人間科学総合研究機関」の設立に向けて、様々な分野の専門家を糾合して検討が行われた。この「人間科学総合研究機構」は基本的にはアメリカのインターディシプリナリーな行動科学がモデルになっていた。ただし、アメリカの行動科学が「風土を異にする日本の社会の諸問題の解決にそのまま適用されえないことは論をまたない」のであり、「他国のそれと異なる独自の人間科学が開発されなければならない」とされた。実際には、心理学者が中心となって研究所案が策定され、「実質的には応用心理学研究所」だという批判が出た。よって、人間行動の複雑な諸問題を解決するために総合的な研究を行うという当初の趣旨からずれが生じた。そこで、医学や生理学、人間工学、さらには政治学なども加えていくべきだという様々な動きが生まれ、結局うまくまとまらなかった。

その後、1972年に大阪大学人間科学部が開設された。阪大の人間科学部は心理学、社会学、教育学などを中心として創設されたのだが、その設立意図には「人文諸科学と相覆い、自然科学に対しては開かれた態度をとる」とうたわれていた。これはもともとピアジェの言葉であり、フランス的な「人間科学」の流れを汲む部分があったと思われる。1987年には、早稲田大学人間科学部が開設された。大阪大

学の人間科学部と異なる点として、健康やスポーツへの関心を強く打ちだした応用的な性格を備えていたことが指摘できるだろう。こういった応用的な人間科学はアメリカの州立大学に多く見られるようである。もちろん、急いでつけくわえなくてはならないが、早稲田の人間科学部には基礎科学科が置かれたように、基礎的な学問もおろそかにしていたわけではない。

大阪大学や本学に人間科学部が開設された後、日本では多くの大学で「人間科学」と名のついた学部が設立されてきたが、その内容は様々である。田畑稔先生（大阪経済大学）は人間科学を6つに分類されている。1つは、「便宜系人間科学モデル」で、様々な事情からいろいろな分野の学問が集まった寄り合い所帯的な人間科学である。2つめは「自然系人間科学モデル」で、医学や生理学を基礎として人間を自然科学的に探究する科学である。3つめは「還元系人間科学モデル」である。これは、自然科学を用いて人間を説明することこそが唯一の人間科学であるという立場を取る。「自然系人間科学モデル」と似ているが、「還元系人間科学モデル」は自然科学で人間についての研究はすべて覆い尽くせる、つまり人間科学は実験・数量化という自然科学的な方法にすべて還元されるというモデルである。一方、そのような自然科学的な方法もあるが、階層が違う人文学的な手法なども認めるのが「自然系人間科学モデル」であり、そこに違いがある。4つめの「自立系人間科学モデル」は、哲学や社会学といった、自然科学とは比較的是なれた領域で自立的に人間を研究するというモデルである。5つめは「総合系人間科学モデル」で、人文学・自然科学・社会科学の総合的な人間科学であり、6つめの「応用系人間科学モデル」は、人間科学を生活や健康のために応用していくというモデルである。田畑先生はこのように分類されているが、本学の人間科学部はどのモデルにあてはまるのかと考えてみると、おそらく「総合系人間科学モデル」と「応用系人間科学モデル」の両方の性格を併せ持つように思われる。

19世紀に学問の専門分化が起こり、「科学」が誕生する。そのときの学問の模範は自然科学であった。20世紀には、その19世紀的学問に対するオルタナティブとして、各地でそれぞれ異なる「人間科学運動」が展開された。ドイツでは自然科学的な学問への対抗としての精神科学、アメリカでは専門分化した学問の再統合としての実証的なサイエンス・オブ・マン、フランスでは哲学にも自然科学にも開かれた学としての人間科学が生じた。そして日本においては、田畑先生がまとめられたように様々な人間科学が雑居する状態になっている。こうした雑居状態の中から、21世紀にどのような人間科学を目指していけばよいのかということを考えていきたい。